

指揮 **キンボー・イシイ**  
Conductor Kimbo Ishiiヴィオラ **杉田 恵理**  
Viola Eri Sugitaチェロ **タマーシュ・ヴァルガ**  
Cello Tamás Vargaコンサートマスター (客演) **鍵富 弦太郎**  
Guest Concertmaster Gentaro Kagitomiリヒャルト・シュトラウス  
Richard Strauss

## 交響詩「ドン・ファン」

Don Juan, Op.20, TrV156

ゲオルク・テレマン  
(キンボー・イシイ編)  
Georg Telemann  
(arr. Kimbo Ishii)

## 組曲「ドン・キホーテのブルレスカ」

Suite "Burlesque de Quixotte" TWV55:G10

- I. Ouverture
- II. Le Reveil de Quixotte
- III. Son Attaque des Moulins a Vent
- IV. Les Soupirs amoureux apres la princesse Dulcinee
- V. Sance Panche berne
- VI. Le Galope de Rosinante
- VII. Celui d'Ane de Sanche
- VIII. Le Couche de Quixotte

休憩 Intermission

リヒャルト・シュトラウス  
Richard Strauss

## 交響詩「ドン・キホーテ」

Don Quixotte, Op.35, TrV184

- Introduction: Mäßiges Zeitmaß  
Theme: Maggior
- Variation I. Gemächlich
  - Variation II. Kriegerisch
  - Variation III. Mäßiges Zeitmaß
  - Variation IV. Etwas breiter
  - Variation V. Sehr langsam
  - Variation VI. Schnell
  - Variation VII. Ein wenig ruhiger als vorher. Flatterzunge
  - Variation VIII. Gemächlich
  - Variation IX. Schnell und stürmisch
  - Variation X. Viel breiter
- Finale: Sehr ruhig

主催：(公財)九州交響楽団

後援：福岡県・福岡市・(公財)福岡市文化芸術振興財団・NHK福岡放送局・(公財)九州文化協会  
福岡文化連盟・九響後援会助成：福岡県・福岡市・文化庁文化芸術振興費補助金(舞台芸術等総合支援事業(公演創造活動))  
| 独立行政法人日本芸術文化振興会

協力：(公財)アクロス福岡

特別協賛：

大成建設  
TAISEI  
For a Lively World



## Pre Talk

開演 10分前より、ホールにてプレトークを行います。  
お早めのご来場でぜひお楽しみください。

## Seeing Off

本公演終了後にロビーにて楽団員有志がみなさまをお見送りいたします。  
わずかな時間ではございますが、お気軽にお声がけください。



© R29photography

指揮 キンボー・イシイ  
Conductor Kimbo Ishii

ベルリン・コミッシェ・オーパーの首席カベルマイスターを経て、マクデブルク劇場音楽総監督、大阪交響楽団首席客演指揮者、ドイツ・シュレースヴィヒ＝ホルシュタイン州立劇場音楽総監督などを歴任。近年は日本国内でも精力的に活動中。

N響、読響、都響、新日本フィル、大響、京響、名古屋フィル、札響、九響などの主催公演で指揮。また、日本でのオペラ活動としては、びわ湖ホール『フィガロの結婚』『劇場支配人』『道化師』、関西二期会『魔弾の射手』がある。

12歳で渡欧し、ウィーン市立音楽院にてヴァイオリンをワルター・バリリ、ピアノをゲトルド・クーバセックに師事。その後、ジュリアード音楽院にてヴァイオリンをドロシー・ディレイに学び、1992年に指揮に転向。1993年と1995年のタングルウッド音楽祭に奨学生として参加。指揮を小澤征爾、サイモン・ラトルをはじめとする著名な指揮者に師事。その後、ボストン交響楽団とニューヨーク・フィルに同時にカバーコンダクターとして起用され、小澤征爾氏をはじめ、サイモン・ラトル、ベルナルド・ハイティンク、アンドレ・プレヴィン等各氏のアシスタントを務めた。

1995年にはニコライ・マルコ国際指揮者コンクール（デンマーク）で入賞。2010年には「第9回斎藤秀雄メモリアル基金賞」指揮者部門を受賞。

Kimbo Ishii has served as Music Director to various Orchestras and Opera houses such as 2019–2022 General Music Director of the Landestheater Schleswig-Holstein in Germany, 2010–2019 General Music Director of the Theater Magdeburg, 2009–2013 Principal Guest Conductor of the Osaka Symphony Orchestra in Japan, and 2006–2008 Principal Conductor (Kapellmeister) of the Komische Oper Berlin. For several seasons he was Cover Conductor with both the Boston Symphony Orchestra and the New York Philharmonic where he had assisted world-class conductors such as Seiji Ozawa, André Previn, Bernard Haitink, Sir Simon Rattle etc. Ishii was a prizewinner in Denmark's Nikolai Malko International Conducting Competition in 1995, and in 2010 he was also bestowed the "Hideo Saito Memorial Fund Award" (Sony Music Foundation).



© Olga Kretsch

チェロ タマーシュ・ヴァルガ  
Cello Tamás Varga

1969年ブダペスト生まれ。ウィーン・フィルハーモニー管弦楽団首席チェリスト。ソリストとしてのウィーン・フィルとの協演は、最も輝かしいキャリアの一つである。2000年シノーポリ指揮でベートーヴェンの三重協奏曲、2005・06年にエッセン・バッハ指揮でシューマンのチェロ協奏曲、09年にメータ指揮でR.シュトラウスの「ドン・キホーテ」、17年にはネルソンス指揮でドヴォルザークのチェロ協奏曲を演奏し好評を博した。2019年には、ダナイローヴァと、世界的ピアニストであるブッフビンダーとのベートーヴェンの三重協奏曲でネルソンスと再共演。

ソリストとして全世界で活躍し、R.ムーティ、小澤征爾、M.T.トーマス等、著名な指揮者と共演している。室内楽でもザルツブルク音楽祭、ウィーン芸術週間、ブダペスト・スプリング・フェスティバル等、主要音楽祭に定期的に出演している。

近年、25枚以上のCDをカメラータ・トウキョウ、ナクソス、フンガロトン、キング・レコード、カヴァリ・レコードで録音。2018年10月には2度目となるJ.S. バッハの無伴奏チェロ組曲全集を収録。

Tamás Varga was born in Budapest in 1969. He is now able to look back on a career spanning over 25 years as principal cellist of the Vienna Philharmonic Orchestra. His solo performances with this orchestra count without doubt amongst the most illustrious of his career. Performances of the Beethoven "Triple Concerto" under Giuseppe Sinopoli in 2000, Schumann Cello Concerto under the direction of Christoph Eschenbach in the 2005/2006 season, Richard Strauss' "Don Quixote" under Zubin Mehta in 2009, the Dvorak Cello Concerto in March 2017 under Andris Nelsons were all critically acclaimed by the press. In 2019 Tamás Varga, along with his colleague Albena Danailova and the world renowned pianist Rudolf Buchbinder performed the Triple Concerto by Ludwig van Beethoven, once again under the direction of Andris Nelsons. As a soloist he has visited every continent and worked together with famous conductors, including Riccardo Muti, Seiji Ozawa and Michael Tilson Thomas. In the past several years Tamás Varga has recorded more than 25 CDs for the recording companies Camerata Tokyo, Naxos, Hungaroton, King Records and Cavalli Records.



© Clara Evens

ヴィオラ 杉田 恵理

Viola Eri Sugita

桐朋学園大学、クロンベルク・アカデミー、ベルリン芸術大学、ハノーファー音楽大学卒業。Quartet Berlin-Tokyo創設メンバー。フィンランド放送交響楽団副首席を経て、ベルリン・コンツェルトハウス室内オーケストラ、大阪フィル、日本フィル、京都市響、メクレンブルク・シュターツカペレ等にゲスト首席として客演。ARDミュンヘン国際音楽コンクール特別賞をはじめ、ニールセン国際室内楽コンクール第2位、オランダ国際弦楽四重奏コンクール優勝など多数受賞。国内外の主要音楽祭に招かれ、ベルリン・フィルハーモニーやアムステルダム・コンセルトヘボウ等に出演し、繊細かつ深みのある音色で高い評価を得る。室内楽奏者としても厚い信頼を集めるほか、ソリストとして大阪フィル、フランクフルト・シンフォニエッタ、フィルハーモニー・バーデン＝バーデン、東京シティ・フィル等と共演。文化庁、ローム等の助成を受ける。現在ドイツと日本を拠点に活動。

使用楽器はサントリー芸術財団貸与パオロ・アントニオ・テストレー(1728年製)。

Eri Sugita studied at Toho Gakuen, Kronberg Academy, Berlin, and Hannover. A founding member of Quartet Berlin-Tokyo, she has won major international competitions, including the ARD Munich International Music Competition and first prize at the Orlando International String Quartet Competition. Former Associate Principal of the Finnish Radio Symphony, she has appeared as guest principal with leading orchestras in Japan and Europe, performing at renowned festivals and halls such as the Berlin Philharmonie and Concertgebouw. She plays the Paolo Antonio Testore viola (1728) on loan from the Suntory Foundation for the Arts and is active as a soloist, chamber, and orchestral musician in Germany and Japan.

解説 西田 紘子 (音楽学/九州大学大学院 芸術工学研究院 教授)

本日のプログラムは、ヨーロッパ文学が生み出した2人のキャラクター「ドン・ファン」と「ドン・キホーテ」をめぐる音楽の旅。時代の異なるこれらの作品群をつらぬくのは、「手の届かない理想へのあこがれ」と「現実との摩擦」という普遍的なテーマである。

破滅するドン・ファン、現実を受け入れて死ぬドン・キホーテ、そして理想と現実のズレを笑うバロックのユーモア。3つのアプローチをとおして、人間がいかにおろかで愛おしい存在であるかを体感できるだろう。

## 交響詩「ドン・ファン」

リヒャルト・シュトラウス(1864—1949)

シュトラウスが24歳で作曲した本作は、管弦楽法における逸材ぶりを世に知らしめた出世作。本人の指揮で行われた初演は成功を収め、一躍ヨーロッパ楽壇のトップへとおどり得ることとなる。現在でもオーケストラの入団試験において、弦楽器やホルンの課題曲としてとりあげられるほど、高度な技巧が求められる難曲としても知られる。

本作は、ハンガリー出身の詩人ニコラウス・レーナウの未完の詩に触発されて生まれた。レーナウの描くドン・ファンは、好色漢という従来の人物像とは異なり、「究極の女性」と「理想の愛」を渴望するロマン主義的な探求者である。つぎつぎとあらたな愛に身を投じるが、けっして心が満たされることはなく、やがて虚無感にさいなまれる——最後は決闘のさなかに生の無意味さを悟り、みずから剣を捨てて致命傷を負うという破滅的な結末を迎える、というもの。作曲家はこの詩から3つの断片をとりだしてスコアの冒頭に掲げ、音楽の指針とした。余談であるが、本作にとりくむ前年、シュトラウスはのちに妻となるパウリーネと出会っている。

楽曲はエネルギッシュな上昇で幕を開け、ホ長調でドン・ファンの若さ、活力、燃えあがる情熱を象徴する主題が提示される。その後、めぐりあう女性たちを象徴するエピソードが続く。ヴァイオリン・ソロが奏でるかわいらしいメロディや、オーボエによる抒情的なメロディは、それぞれ異なる女性との官能的な愛の場面を想像させる。

中盤では、ホルンが勇ましい主題を吹き、ドン・ファンの自信に満ちた雄姿がドラマティックに示される。しかし、情熱が最高潮に達した瞬間、音楽は突如として崩壊。全体

止の静けさを破って突き刺さるトランペットの鋭い音は、決闘で彼の肉体をつらぬいた剣の一撃を表している。震えながら下行する弦楽器が心臓の鼓動の弱まりを暗示。ホ短調の暗い響きのなか息をひきとる。

作曲：1888年  
初演：1889年11月11日 ヴァイマル、作曲者の指揮  
使用楽譜：Kalmus  
編成：フルート3（ピッコロ持替）、オーボエ2、イングリッシュホルン、クラリネット2、ファゴット2、コントラファゴット、ホルン4、トランペット3、トロンボーン3、テューバ、ティンパニ、シンバル、トライアングル、グロッケンシュピール、ハーブ、弦5部

## 組曲「ドン・キホーテのブルレスカ」

ゲオルク・テレマン(1681—1767) / キンボー・イシイ編

テレマンは、J.S. バッハやヘンデルと同時代に活躍した、音楽史上もっとも多作な作曲家のひとり。この組曲は、セルバンテスの有名な小説「ドン・キホーテ」を題材としており、「ブルレスカ」（おどけ、茶番）というタイトルのおり、騎士道物語をパロディ化したユーモアと軽やかさを特徴とする。原曲は、弦楽器と通奏低音（即興的に和音をつけて伴奏する演奏様式）のために作曲されている。伝統的なフランス風序曲で幕を開けたあと、物語の場面に沿った短い舞曲が続く。

- |                      |                       |
|----------------------|-----------------------|
| 第1曲：序曲               | 第5曲：かつがれたサンチョ・パンサ     |
| 第2曲：ドン・キホーテの目覚め      | 第6曲：ロシナンテのギャロップ       |
| 第3曲：ドン・キホーテの風車への突撃   | 第7曲：サンチョ・パンサの口バのギャロップ |
| 第4曲：ドゥルシネア姫に寄せる愛のため息 | 第8曲：眠りにつくドン・キホーテ      |

「ドン・キホーテの目覚め」では彼が妄想の世界から起きだす様子が、「風車への突撃」では激しい弦楽器の刻みによって無謀な戦いが表される。ほかにも、ドゥルシネア姫のため息（第4曲）や、毛布で宙にほうり投げられる従者サンチョ・パンサの悲惨なさま（第

5曲）、やせた愛馬ロシナンテとサンチョ・パンサの口バの足どりの奇妙な対比（第6・7曲）など、テレマンの音画的手法（音を使って絵を描くように表現すること）はとても演劇的だ。最後は、疲れはてたドン・キホーテの眠りとともに曲を閉じる。

本日は、キンボー・イシイによる編曲版をお楽しみいただく。編曲者ご本人によれば、屋外で大道芸とともに演奏することをイメージして打楽器をとり入れ、当時の奏法や装飾音などの音づかいを尊重した編曲にしたとのこと。なお、イシイはテレマンの生誕地であるドイツ・マグデブルクの劇場で長年、音楽総監督を務めるなど、この作曲家に深いゆかりをもつ。

作曲（原曲）：1720年頃（諸説あり）  
初演（原曲）：不明  
使用楽譜：Thomi-Berg  
編成（原曲）：ヴァイオリン2部、ヴィオラ、通奏低音  
編成（キンボー・イシイ編曲版）：太鼓、タンバリン、ウッドブロック、鈴、ウィンドマシーン、弦5部、チェンバロ

## 交響詩「ドン・キホーテ」

リヒャルト・シュトラウス(1864—1949)

こちらもセルバンテスの同名小説を題材とした作品。副題に「大管弦楽のための騎士道的な性格の主題による幻想的変奏曲」とあるとおり、序奏、主題と10の変奏、そして終曲からなる変奏曲形式をとる。シュトラウスの交響詩のなかでも独特な構成をみせ、特定の楽器を登場人物にみだてる「協奏交響詩」としての側面が強い。

ドン・キホーテは、騎士道物語を読みふけるあまり、自分を騎士であると思いこむ——この序奏を経て、主題が提示される。ほこり高くも妄想にとりつかれたドン・キホーテを「独奏チェロ」が、リアリストで少しコミカルな従者サンチョ・パンサを「独奏ヴィオラ」（およびテナーテューバとバスクラリネット）が担当。これらの楽器のかけ合いが、2人のキャラクターの対比や心理状態の変化を雄弁に物語っていく。

各変奏は、小説内のエピソードに対応している。第1変奏の風車との戦いから始まり、

第2変奏は羊の群れを敵軍と勘違いして突撃する場面。ここでは金管楽器のフラッター・タンギング(舌のこまかい動きで音を震わせる奏法)を用いて羊の不愉快な鳴き声を模倣するという、当時としては新しい手法がとられた。主従の対話がくり広げられる第3変奏、巡礼者の一団を悪党と勘違いして襲いかかるものの気絶する第4変奏、架空のドゥルシネア姫を夢みる第5変奏、通りがかりの村娘を姫と勘違いする第6変奏が続く。

第7変奏では、ウィンドマシーン(風音器)を導入し、空を飛んでいるという主人公の妄想を環境音つきで表現するなど、リアルで映画的な工夫が凝らされている。さきほどのテレマンが用いた音画とはだいぶ違う手法だ。小舟がひっくり返ってずぶぬれになる第8変奏に続き、第9変奏では2本のファゴットが古めかしいパッセージを奏する。これは2人の修道士がブツクサ議論する声を模したものであるが、シュトラウスに古い作曲規則を押しつけてくる批評家たちへのあてこすりとも解釈できるだろう。最後の変奏で決闘にやぶれたドン・キホーテは、ついに狂気から解放され、自身のおろかさを悟る。チェロ独奏のすみきったメロディが人生の穏やかな終わりを告げる。

作曲：1897年

初演：1898年3月8日ケルン、フランツ・ヴェルナー指揮

使用楽譜：Kalmus

編成：フルート2、ピッコロ、オーボエ2、イングリッシュホルン、クラリネット2 (Esクラリネット持替)、バスクラリネット、ファゴット3、コントラファゴット、ホルン6、トランペット3、トロンボーン3、テナーチューバ、チューバ、ティンパニ、大太鼓、小太鼓、シンバル、サスペンデッドシンバル、タンバリン、トライアングル、ウィンドマシーン、グロッケンシュピール、ハーブ、弦5部、独奏ヴィオラ、独奏チェロ

 演奏会のご感想をお寄せください

5月13日 / 第439回 定期演奏会のご感想はこちらから→




音楽をとおして 私が変わり  
世界を良くする人になる

**エリザベト音楽大学**

〒730-0016 広島市中区鞆町4番15号  
Tel. 082-221-0918(代) Fax. 082-221-0947  
URL: <https://www.eum.ac.jp/> E-mail: [kikaku01@eum.ac.jp](mailto:kikaku01@eum.ac.jp)

 大学ホームページ  大学Instagram

 ストレスケアユニット  
クローバー

うつ状態、神経症等の方を対象とした病床です。主に休養、安静を目的とした入院治療が、症状の改善につながると思われる方が対象で、全室個室(バス・トイレ付)の入院施設です。

診察時間 午前 9:00-12:30  
午後 13:30-17:00  
休診日 土曜午後 / 日曜 / 祝日



児童思春期・ストレス・認知症に関する相談  
精神科・心療内科・内科・循環器内科  
放射線科・リハビリテーション科

☎0942-73-0111

医療法人 寿栄会  
**本間病院**  
(財)日本医療機能評価機構認定病院  
福岡県小郡市三沢 526 番地